

# ジョン・デューイ

## —メリオリズムを生きる思想—

藤 井 千 春

### はじめに

思想は、その思想家が生きた時代の社会状況から生まれ出ます。その時代、人々が生きる上でどのような問題が意識され、人々がその問題の解決にどのように取り組もうしていたのかとの相関において、思想は生まれてきます。思想とは、社会問題の解決に取り組む人々が求めた理想、価値、観念、考え方などが、言語によってまとめられて表現されたものです。ですから、思想を理解するためには、その思想が生み出された背景について、つまり、その時代の社会状況とそこにおいて人々が解決に向けて取り組んでいた社会的な問題について知ることが必要です。そのようにすれば、その思想家が、なぜそのような思想を論じたのかについて、立体的に理解することができます。

本日お話をさせていただくのは、ジョン・デューイ (John Dewey, 1859-1952) の思想です。私は、デューイの思想を「メリオリズムを生きる思想」というように、その特色について副題で示しました。メリオリズム (meliorism) とは、聞きなれない言葉かもしれませんが。一般的に言えば、「改良主義」という意味です。デューイの生きた時代における、デューイ自身の思想的な問題意識に即していえば、「人間は自らの知性的な努力により社会を改良することができる」という立場を意味します。

みなさんは、「人間は自らの知性的な努力により社会を改良することができる」など、当たり前のことだと思うかもしれませんが。しかし、今から100年と少々前、1900年前後のアメリカでは、そのようには考えられていなかったのです。社会を進歩させることに人間は無力だ、「愚かしい努力」であり、むしろ有害だというような考え方が根強かったのです。デューイは、そのような考え方を反駁し、「人間は自らの知性的な努力により社会を改良することができる」という立場を擁護する論理の構築を、自らの思想的な課題としました。デューイは、メリオリズムを擁護する論理を構築し、人間自身の知性的な努力によって社会改良に取り組んでいる人たちを、思想的に支えるという役割を果たそうとしたのです。

では1900年前後のころ、アメリカ社会はどのような状況にあったのでしょうか。そこではど

のような社会問題が発生し、人々はその問題の解決にどのように取り組もうとしていたのでしょうか。また、そのような取り組みに対して、それを無力だ、有害だとして妨害する主張は、どのような立場を擁護するために、また、どのような考え方に基づいて主張されていたのでしょうか。

## 1. デューイの生涯における『民主主義と教育』の位置づけ

デューイは、1859年から1952年まで、19世紀から20世紀へという転換を挟んで、100歳近い長い生涯を生きました。日本に当てはめると、江戸時代末に日米の国交が開かれたところから、第二次世界大戦後のアメリカによるわが国の占領が終了する年までです。デューイは長い生涯を通じて膨大な著作、しかも教育に関するものだけではなく、哲学、倫理学、心理学、政治学、経済学、芸術論、宗教論など、幅広い分野にわたる著作を残しました。しかし、私は、デューイの著作の中でも、1916年の『民主主義と教育』が、デューイの思想が経験を中心概念として論じられ、体系的に完成された著作であると考えています。というのは、1916年、デューイは57歳であり、当時の平均寿命から考えてもすでに老荘の成熟した学者であり、思想的には完成を迎えて当然の年齢にありました。また、アメリカはその翌年から第一次世界大戦に参戦し時代的な転換点を迎えます。デューイが1800年代末から参加してきた革新主義運動 — 後に説明します — が、終結を迎えた年として一般的にはみなされています。つまり、デューイは30歳代、40歳代、50歳代と、アメリカにおける革新主義運動という社会改良運動に参加していました。『民主主義と教育』は、その運動への参加を通じて生成してきた思想を、経験を中心概念として体系的にまとめた著とみなすことができるのです。その後のデューイの膨大で、幅広い分野にわたる著作では、デューイが『民主主義と教育』において論じた諸テーマが、哲学、倫理学、心理学、政治学、経済学、芸術論、宗教論などごとに敷衍されています。また、それぞれの著作を執筆した時代における社会問題にも言及されています。それぞれの著作は、デューイの思想の各論として、発展的に詳述されたものなのです。つまり、『民主主義と教育』で取り上げた諸テーマを、経験を中心概念として反省的に深化・発展させ、自らの思想を哲学として体系化していったように読み取ることができます。

では、デューイが青壮年期に参加した革新主義運動とは、アメリカのどのような社会状況に対する「革新」として立ち現れた運動だったのでしょうか。

## 2. 「嵐のような工業化」とその帰結

南北戦争の終了（1865年）後、アメリカでは工業化が急速に進み、1800年代末にはイギリスを抜いて世界第一の工業国となりました。わずか30年くらいの間に、人々は農村の地域ごとのコミュニティを単位とした生活から、全米的な経済圏に巻き込まれた生活へと転換を余儀なくされました。農民たちも農産物の市場価格や大都市への輸送条件など、資本主義の経済活動に左右

されるようになりました。

この時期の工業化は、自由放任を原則とする経済活動によって進展されていました。つまり、経済活動は各企業の自由な競争に任せられ、政府は各企業の活動を規制や調整するなど、それに対して介入することはありませんでした。経済活動は、個人、すなわち「私」が生来有する自然権に基づく活動であり、それに政府が介入することは公権力の濫用、私権に対する不当な侵害だと考えられていました。このような考え方は、1700年ごろのジョン・ロックの自然権思想に源流があります。ロックは財産権を、それぞれの個人に自然権として認められている不可侵の権利であると主張しました。時代を経て1700年代後半に活躍したアダム・スミスは、自分の財産を増やす経済活動も自然権として認められている私権だと論じました。そして、公権力は経済活動を制約してはならないというように、経済活動に対する自由放任を主張したのです。このような考え方が1800年代後半のアメリカにおいても継承されていたのです。

しかし、1800年代後半という産業革命を経たのちのアメリカの経済活動は、スミスの時代状況とは大きく異なっていました。スミスは、経済活動に対する伝統的な慣習や特権などの不合理な制約からの解放を求めて、すなわち、そのような社会問題の解決のために経済活動の自由放任を主張しました。しかし、1800年代後半のアメリカにはそのような古い不合理や制約は存在せず、自由放任は、それらからの自由ではなく、実質的には弱肉強食的な企業間の競争の自由、いわば強いものが自由にする権利となっていました。そのため工業化の進展とともに、企業間の自由放任に基づく競争は、勝ち残りのためのトーナメント戦のような闘争状態になっていました。経済的な競争に勝った企業は敗れた企業を吸収し、やがて巨大な独占企業が誕生しました。例えば、カーネギーの鉄鋼会社、ロックフェラーのスタンダード石油などです。そして、自由放任の経済活動の帰結としての巨大な独占企業の誕生は、逆に多くの人々の経済活動における不自由、不平等、不公正を生み出すことになりました。自由放任の結果として、多くの人々が様々な不自由に苦しめられることになったのです。

例えば、資本が弱小の企業は、市場に参入しようとしても価格競争などの点で資本力の強い独占企業と勝負することはできません。また、輸送や販売など流通網まで独占企業の傘下に置かれていた場合、製品を輸送して販売することができません。労働者は、賃金や労働時間の改善を独占企業に申し入れて拒否されたとしても、他に働く場所がないため有利な労働条件の職場に移ることはできません。実質的に職場を選択することはできず、独占企業の押し付ける不利な労働条件で働くことしかできません。消費者は、市場が特定の企業の製品で独占された場合、購入する商品を選択することはできません。質の悪い商品が高価格で購入することしかできなくなります。市場における商品の選択の自由はなくなります。独占企業対弱小企業、独占企業対労働者、独占企業対消費者との間に不平等や不公正が発生し、弱小企業、労働者、消費者の側は経済活動が不自由となる状態に陥っていたのです。そのような社会的な対立が人々に意識され、解決されるべき社会問題となっていたのです。

巨大な独占企業の誕生は、企業の経済活動にとどまらず、国民の様々な生活に不自由な状態を

強制し、経済的な格差やそれによる対立を引き起こすことになりました。労働争議も流血を伴う大規模で過激なものとなりました。

### 3. 革新主義運動

産業社会の発展により、1900年ごろには、アメリカでは大都市に都市中間層という新しい社会集団が形成されました。都市中間層は商工業経営者など旧中間層、公務員、企業社員、医師や法律家などの専門職などから構成されています。比較的安定した収入があり教養水準も高い人たちです。それらの人たちが、当時、発達し始めたジャーナリズムを媒介として、社会問題に関する情報を共有し、その問題の解決に向けて世論を形成しました。そのようにして、社会改良の運動を推進する主体としての結びつきが形成されました。

アメリカにおける革新主義運動とは、都市中間層がジャーナリズムを媒介として結びつくことによって担われた社会改良運動だったのです。一般的には、1890年ごろから1917年の第一次世界大戦参戦までの時期に展開されたとされています。この運動は、連邦政府や州政府の規制や調整、すなわち、公権力の介入による経済活動における公正の実現をめざすことが中心的な目標の一つでした。この目標以外にも、都市政治のボス支配からの転換・正常化、移民や経済的困窮者に対する社会福祉の実施、学校教育の改革など多方面に及びました。公共の福祉の実現をめざし、公権力による政策を通じての社会改良をめざしたという点で共通する、多様な社会問題に対する群発的な取り組みの総称といえます。

この運動は、経済活動だけではなく、人々の生活全般において、公共の福祉という観点から公権力が人々の活動や生活に関与していくという、新たな社会原理をアメリカにおいて提唱するものでした。経済活動に関していえば、トラストの規制、労働者保護、消費者保護 — 食品の衛生や薬品の安全など — に関する法律の制定、及び取り締まりや監視に当たる専門家による機関の設置などが実現されました。それにより、政府が公共の福祉を観点にして、経済活動の公正さを維持するために介入することが実現されました。つまり、自由放任の原則からの転換が実現されたのです。ただし、この理念の完全な実現は、一般的には、1929年の大恐慌の発生後に実施されたニューディール政策に待つことになったといわれています。ニューディール政策によって、政府による景気調整や所得再分配など、ケインズ流の修正資本主義が実現されます。

デューイは、思想新聞の発刊の計画、シカゴの移民や貧民のための福祉施設であるハルハウスの活動への参加、シカゴ市民連盟への参加など、革新主義運動に関与しました。最大の参加といえるのは、シカゴ大学に附属実験学校を設置して、自らの理論に基づく新しいタイプの学校教育に取り組んだことです。ここでデューイは、教育の中心の重力、すなわち、学習活動を計画・実行・評価するための観点を、教科 — 何を教えるか — から、子どもの興味関心や成長発達 — どのように育てるか — に移動することを主張しました。そして、子どもが自分たちの興味・関心に基づいて意識を集中して取り組み、社会生活の発展や科学的原理について、しかも協同的

な活動を通じて学ぶという、オキュペーションとしての学習指導を推進しました。この教育実践についてまとめられた著作が『学校と社会』（1899年）です。

このように革新主義運動とは、都市中間階級の人々が、連帯・協同して、公共の福祉の実現をめざして、社会問題の解決に取り組んでいった運動でした。人間自身の知性的な努力によって社会改良をめざした運動だったのです。

#### 4. 企業家からの抵抗

政府による経済活動の規制や調整を求める革新主義運動に対しては、経済活動の自由放任を主張する企業家たちの側からは強い反論が提出されました。

一つは、経済活動の自由は自然権に由来する私権であり、公権力がこれを侵すことはできないという、伝統的な論理に基づく反論です。これは1700年代以来の考え方です。

そして、もう一つは、1800年代後半、まさにこの時代に生まれた考え方に基づく論理です。それは、ハーバート・スペンサーの社会進化論です。デューイの生誕と同時期に発表されたダーウィンの進化論は、生物学など自然科学だけではなく、社会の在り方についての考え方にも大きな影響を及ぼしました。スペンサーは、ダーウィンの「自然淘汰」、すなわち、環境への適応に成功した個体が生き残るという概念を、「適者生存」という概念、すなわち、環境への適応競争に勝ち残ることを通じて優れた個体が選ばれて、その生物種は進化するというように捉え直しました。

そして、当時のアメリカの企業家や自由放任の経済活動を擁護する経済学者たちは、生まれつきに優秀な遺伝子を有する個体が自由な競争により「適者」として選ばれて、そのような自然淘汰を繰り返して人類は進歩するのだというように理解しました。そして、このような理解に基づいて、次のように主張されました。第一に、自由放任の競争を通じて優れた遺伝子を有する個人が勝ち残り、人類や文化・社会の進歩が達成される、第二に、企業家、しかも競争に勝ち残った大企業家こそ、知恵、勇気、精神力、体力などに優れた「強靱な個人」である、第三に、優れた遺伝子を持つ個人が、自由にその遺伝された能力を発揮できるように放任することが人類や文化・社会の進歩のための条件であり、公権力が経済活動を規制・調整することは劣った遺伝子を有する弱者を保護し、人類や文化・社会の進歩を妨げることになる、と。そして、このような考え方は、生物学の理論に基づいた人間世界についての真理であると主張されたのです。カーネギーは、スペンサーの社会進化論を絶賛したと伝えられています。

また、社会進化論を支持する人たちは、個人の能力は遺伝子により生まれつき決まっていると主張しました。人類や文化・社会が進歩するためには、その遺伝された能力が自由に制約を受けずに発揮されることにより、優れた者が勝ち残り、他方、劣った者が淘汰されることを重視したのです。そのような考え方に基いて経済活動における自由放任の原理の維持を主張したのです。このような立場からすれば、政府による経済活動の規制・調整は、弱者を生き残らせて進歩を妨

げる「愚かしい努力」となるのです。

この当時、1800年代の末、もう一つ、革新主義運動の立場であるメリオリズムにとっての論敵が、一つの大きな勢力となっていました。マルクス主義の唯物史観です。マルクスは人間の社会の制度や法律などの在り方 — 「上部構造」 — は、その時代に社会の生産力によって規定され、生産力の増大に伴って、経済的な平等を実現する方向で、法的に組み替えられていくと論じました。唯物史観では、生産力の増大に伴って社会の在り方が経済的な平等を実現する方向で組み替えられていくのであれば、生産力が増大した資本主義の次の社会の在り方は、必然的に社会主義、そして共産主義だと予言されていたのです。歴史はそのように法則に従って、必然性をもって変化していくのだと主張されました。そして、唯物史観によれば、社会の在り方は法則に従って変化していき、その変化の方向そのものを人間が変えることはできないのです。人間にできることは変化の方向を知り、その方向に従って生きていくことだけなのです。そのような生き方が、歴史の進む方向において進歩的、あるいは前衛的なのです。また、マルクス主義では、社会の本質は経済的な支配階級と被支配階級との間での階級闘争にあると考えられました。人間の正しい生き方は、歴史の法則を知り、その方向性を促進するための闘争や暴力も辞さない革命に参加することだと論じられていました。労働争議が多発し過激化する中で、マルクス主義者による暴力的な社会革命に対する危機が、アメリカにおいて人々に現実的に感じられていました。

自由放任の支持者とマルクス主義者とは、それぞれが主張している経済活動の在り方は真逆です。自由放任の支持者は、個人の経済活動の自由を尊重し、政府が経済活動に介入することを拒否しました。他方、マルクス主義者は、政府による経済活動の全面的な統制により、人々に経済的な平等を実現することを主張していました。しかし、人間の自らの知性的な努力による社会改良の可能性を否定している点、および、社会の本質を闘争や競争にしている点では共通しています。したがって、革新主義運動では、その運動を推進するために、この二つの論敵の論理を論破するだけの独自の論理を構築し、メリオリズムの可能性と必要性を論証することが課題となったのです。適者生存の自由競争により強い遺伝子を有する個体が生き残るのが世界の真実なのでしょうか。あるいは、社会の歴史は法則に基づいて階級闘争として進展しているのでしょうか。いずれにしても、人間の知性的な努力は無用、あるいは無力なのでしょうか。

## 5. 自由放任の論拠に対する反駁 — メリオリズムの擁護 —

デューイは、どのような先行思想からどのような考え方を吸収して、これらの論敵に対して反駁を試みたのでしょうか。そして、自身のメリオリズムの論理をどのように構築したのでしょうか。

デューイは自らの思想を生成する過程で、ヘーゲル主義、進化論生物学、プラグマティズムを吸収したといわれています。デューイは、それらの思想を素材として、それらに含まれている諸観念を取捨選択して、メリオリズムを擁護する論理として、独自の経験概念を構築しました。

## (1) ヘーゲル主義の吸収

### ① 人々のつながりの先行

デューイは、ヘーゲルの社会についての考え方から、人々はつながりの中で生きているという考え方、すなわち、個人の生き方は集団のつながりの在り方によって制約されたり、保障されたりするという考え方を学びました。

ジョン・ロック以来のイギリスの社会契約論に基づく考え方では、社会に先立って、自然状態において、生まれながらに生命、身体、財産の自由 — 自然権 — を有する個人が存在していると想定されました。そのような個人が、相互の自然権を保護する目的で、相互に契約を結ぶことによって政府が誕生したと想定されました。この考え方、すなわち、社会契約説では、自由を有する個人が政府よりも先に存在していると考えられています。そして、政府の任務は個人の自然権の保護にあると設定されています。だから、個人に生まれながらに付与されている自然権 — その一つが財産権、後には経済活動の自由 — は、政府の権力によって侵害されてはならないと主張されたのです。

しかし、現実的に考えると、歴史上のいつ、どこで社会契約は結ばれたのでしょうか。社会契約説は一種の仮定です。政府による権力の濫用を防止するための、みんなで合意した一つの考え方なのです。つまり、基本的人権（自然権）をお互いに尊重し合える社会を実現するための形而上学なのです。自然権とされる自由が、個人に生来所有されていることは、どのような論理によって論証することができるのでしょうか。もちろん現代において、基本的人権は何よりも尊重されなければなりません。しかし、それは、私たちの生きる社会の前提として、このような仮定に立つことにみんなで合意することによって成り立っているのです。つまり、基本的人権は、みんなの自由を最大限尊重し合おうという、それが保障される社会の在り方を大切にしようという、私たち自身の努力によって現実的に守られているのです。基本的人権として設定されている自由は、社会における人々のつながりの中で、そのつながりの在り方が大切に維持されることによって保障されるのです。

人間の歴史を記述的に、すなわち、目的や理想を負荷することなく見るならば、人間は集団で生活することによって生存してきました。また、事実として、人間は現実には何らかの集団、例えば家族、地域、国家、会社、学校などの一員として生きています。それぞれの集団のつながりの中で、そのつながりを支える成員として活動しています。ヘーゲルは、人間はそのようなつながりの中で生きる存在であると考えました。そして、重要なことは、そのつながりの在り方だと論じました。ヘーゲルは人間の歴史は、そのつながりが次第に相互の自由を承認し合える在り方に組み替えてゆく過程であると説明しました。ヘーゲルによれば、人間はその精神の発達を通じて、しだいに相互の自由を承認し合えるつながりの在り方に、社会における人々のつながりの在り方を発展させてきたのです。ヘーゲルは、自由について、個人が社会に先立って生来的に所有している権利としてではなく、社会の中で、そのつながりの在り方によって保証される権利として考

えたのです。人間は歴史を通じて、社会に発生した不自由に関する対立を止揚するような、そして、人々の自由をさらに保証するような新たな文化 — 法や制度など — を生み出してきたのです。権力の濫用の防止も、個人の人権の保護も、それらを尊重しようという人々の間のつながりの在り方によって実現されたのです。個人の自由は生まれつき付与されたものではなく、社会において、すなわち、人々のつながりの中で付与され保障されているのです。

## ② 民主主義としてのつながりの在り方

デューイは、ヘーゲルの考え方に学び、社会は、原子のような個人の相互の契約によって成り立っているのではなく、人々を結び付けているつながりによって成り立っているのだという立場に立ちました。個人はすでにそのつながりの中で、そのつながり方に規定されている存在なのです。重要なことは、そのつながりの在り方なのです。

したがってめざすべきことは、そのつながりの在り方を民主主義としてふさわしいもの、すなわち、それぞれの人々の自由が尊重され、平等が実現されるようなつながりの在り方とすることなのです。自由放任の経済活動の下では、人々の間に様々な不自由や不平等が発生していました。そのような社会問題が放置されている状態は、民主主義としてふさわしい社会、すなわち、人々の自由や平等を実現し保障するつながりの在り方ではありません。経済活動の自由放任も、人々のつながりの在り方として人為的に生み出されたつながりの在り方の一つにすぎず、自然世界の本来的真の在り方ではないのです。しかも、そのつながり方は、不自由や不平等など社会に問題を発生させています。経済活動の自由放任の原則は、時代状況に対して旧いつながりの在り方となり、現状の間に矛盾を発生させているのです。ですからヘーゲル主義の立場から言えば、新たな文化、すなわち、法や制度などを創り出すことによって、言い換えると、人々の間に新しいつながりの在り方を設定することによって、止揚され解決されなければならないのです。

このようにデューイは、個人の自由、しかも経済活動の自由を自然権として絶対視する考え方を反駁するために、ヘーゲル主義の考え方に基づいて、社会が人々のつながりによって存在していること、そのつながりの在り方は相互の自由と平等を実現し得るつながりへと変化発展してきたという考え方に立ちました。

## (2) 進化論生物学

### ① 多様性の調和・共生による全体論

デューイもダーウィンの進化論生物学から影響を受けました。しかし、スペンサーとは異なり、デューイは生命世界について、多様な構成要素が相互依存につながり合って全体的に調和して成り立っているという、生態学的な考え方を学びました。

デューイは、生命世界について、スペンサーが理解したような構成要素間の弱肉強食の闘争・競争によって成り立っているとは考えなかったのです。それぞれに個性的な構成要素が相互に支援的に作用し合い、その全体的な調和・共生によって成り立っていると考えました。種の単位で考えた場合、自然界には独り勝ちはないのです。ライオンが強いからといって、ライオンが一人

勝ちしてしまえば、もはやライオンが食べる動物もいなくなってしまう。それではライオン自身も生きることではできなくなってしまう。捕食ということも生命世界の相互依存の一例なのです。また、種内の個体間で考えた場合、個体間が直接的に闘争しているわけではありません。それぞれに多少の形質に差異のある個体が、それぞれに環境へのより有利な適応を試みているのです。生命世界は多様なそれぞれに個性的な構成要素の調和・共生というバランスの上に成り立っているのです。

重要なことは、そのバランスが崩れて不調和が生じたときに、それを回復することです。バランスの不調和は生命が生きる環境の変化によって発生します。環境が変化したときに、それに再適応できずに死滅してしまう種もあります。一方、変化した環境に適応できる身体的形態や能力を有する個体の子孫の系列が生き残り、結果として進化を遂げる種もあります。そのようにして新たな全体としての調和・共生のつながりの在り方へと組み替えられます。この点で生命世界はダイナミズムによって支配されています。環境の変化とは進化のためのふるいではなく、新たな調和・共生を達成するつながりの在り方への転換なのです。

## ② 環境の変化の偶発性

デューイは、自由放任の原理は1800年代末にはすでに時代遅れになっていると指摘しました。自由放任の原理は、アダム・スミスの時代に、古い封建的な特権が優遇されていた状態から経済活動を解放することを目的として主張されました。しかし、経済活動の影響が広く深く多くの人々の生活に影響をもたらす時代になり、自由放任の原則は、新しい環境との間に社会問題の発生など不適応を生み出していると指摘しました。デューイは、進化論生物学の立場から、生命体は環境との相互作用によって生命を維持していると論じています。そして、生命体は環境が変化したときに、新たな相互作用の方式を模索し、それに成功することによって新たな環境に再適応して生命を維持すると論じています。そのような観点から、デューイは、人間について、人間は環境の変化に対して、自らの知性に基づく努力により新しい文化—考え方、制度、法、技術など—を創り出し、それによって新しい環境に再適応を果たしてきたと述べています。人間の歴史において、社会はダイナミズムに支配されており、静的に固定されてはいないのです。

ここで人間にとって重要となる点は、新しい文化の創造へとつながる新しいアイデアは、特定の個人から発生するという点です。そして、人間の場合、そのアイデアは多く他の人々に伝えられ、それらの人々によってよりよいものへと高められていきます。そのアイデアが新しい文化として社会に実現されることにより、その文化は人々の集団において共有されます。新しい文化を創造して共有することにより、人間は集団として新しい環境に再適応してきたのです。環境の変化に対して、一部の人が勝ち残って生き延びてきたわけではありません。多様性を維持したままで全員が集団として生き延びてきたのです。これは人間の知性とその協同による成果です。このことがまさに人間という生物種の歴史を特徴づけているのです。

また環境はどのように変化するかは不明です。進化論的生物学は、生命世界のダイナミズムは偶発性に支配されているという考え方に立ちます。言い換えると、生物の進化の過程には目的は

存在しないのです。ある完成に向けてというように、特定の進化の方向性はないのです。生物種は、環境の偶発的な変化の結果として、それぞれ進化を遂げてきたのです。このような観点に立つならば、人間の歴史には、次第に人々の自由が実現されてきた、あるいは、次第に人々の平等が達成されてきたなど、確かに一定の傾向はみられます。しかし、それらが目的や法則に導かれて実現・達成されたわけではありません。歴史は人間を取り巻く環境の変化によって進展するものであり、環境の変化は偶発的に発生します。ヘーゲルが考えたような人間の歴史を動かす超越的な力 — 絶対精神 — も、マルクスが考えたような法則 — 唯物史観 — もないのです。その時代に発生している社会的な問題を解決し、自由を実現しようとする、また、平等を達成しようとする、人間の知性とその協同に基づいた努力による新しい文化の創造によるのです。そのような努力の結果、人々のつながりの在り方が組み替えられて、人間の歴史は動いてきたのです。

### ③ 再適応における人間の主体性

先に述べたように、デューイは、人間はつながりの中で存在しているという点で、ヘーゲル主義に学びました。しかし、ヘーゲル自身は、人間の精神の発達、また、社会的な問題を止揚する新しい文化の創造は、人間の世界を超越した絶対精神の働きによると論じました。歴史は絶対精神によって、次第に自由を実現していくという目的に向けて動かされていくのです。つまり、人間を超越した力としての絶対精神が、それぞれの時代の指導者の精神に指令を発して、その指導者はあたかも絶対精神の操り人形のように動かされて、社会に新しい文化をもたらすのだと論じました。この点でヘーゲルは、社会問題の解決に向けての、すなわち、人間自身による社会改良に向けての主体的な知性的な努力を認めていません。この点で、デューイは、ヘーゲル主義にみられる絶対主義からは離脱したのです。社会を改良するための新しい文化を創造するのは、人間自身の主体的な知性的な努力によるのです。

マルクス主義の史的唯物論も、先に述べたように、第一に、歴史は必然的な法則に基づいて展開し、その展開の前に人間の力は無力であると、第二に、人間社会は階級間の対立・闘争という関係に本質があると主張します。それに対して、デューイは、人間の歴史は偶発的な環境の変化を契機とし、そこにおける問題を解決し、社会を改良しようとする人間の主体的な知性的な努力とその協同によって達成されると論じています。つまり、必ずしも暴力を伴う革命によって社会が変わるわけではありません。また、人間社会のつながりの在り方は、多様な個性的な要素の相互依存に基づく調和・共生なのです。この点で、共産主義の社会が実現されると、それは労働者階級の一人勝の状態になってしまいます。後にデューイは、ソビエト連邦において、支配者階級と被支配者階級という新たな階級分化が発生していることを指摘しています。ただし、デューイ自身は、1900年代初期には、直接マルクス主義を批判してはいません。ロシア革命直後の時期にはソビエト連邦をむしろ好意的に評価していました。マルクス主義に対しては、スターリンによる独裁が強まってから、1930年ごろから批判を強めました。

マルクス主義と自由放任を主張する立場とでは、経済の在り方については正反対の主張をしました。しかし、両者とも社会の本質を闘争・競争と捉えていました。また、社会改良に対する人

間の主体性については、これらの立場とともに、ヘーゲルもその可能性を否定していたのです。

④ 個性的な能力の必要性和それらの協同による再適応

もう一つ、偶発的な変化に対応するために、多様性がなぜ必要とされるのかについて説明します。環境の変化は偶発的でいつ、どこで、どのように発生するかについて、十分に予想することはできません、しかし、その変化に適切に対応できなければ生物種として生き延びることはできません。先に説明したように、環境の変化に再適応するための新しい文化の創造は、ある一人の個性的な個人に閃いたアイデアが出发点になります。ただし、どのような個性的な能力を持つ個人のどのようなアイデアが必要とされるかは、変化に先立って予想することはできません。だから多様な個性的な能力を集団の中に担保しておくことは、変化に再適応するための保険として必要なのです。人間の集団は、そのような個人が一人いることにより、その個人から発するアイデアによって全員が生き延びることができるのです。この点でも、全員が同じになってしまう一人勝ち状態や全体主義は、偶発的な変化が発生した場合、それに対応することが難しく、集団や社会の存続のためには危ない在り方なのです。

デューイにとって民主主義とは、多様なそれぞれに個性的な能力を有する人々が協同的な活動に参加・貢献しているつながりの在り方です。ですから、デューイにとって民主主義社会とは、多様な個性的な能力が平等に扱われ、それを自由に発揮できるまでに成長が保障されており、そして、それぞれの個性的能力が協同に自由に平等に参加することが制度的に保障されているつながりの在り方なのです。

このようにデューイは、進化論生物学に学ぶことにより、人間の社会の在り方の本質について、分断された個人間や階級間の闘争・競争としてではなく、多様な個性的な個人の相互依存に基づく全体としての調和・共生として捉えました。また、環境の変化は偶発的であるという立場から、歴史を人間の主体的に知性的な努力による文化の創造による集団的な再適応の過程として説明しました。そして、多様性とその協同を偶発的な環境の変化に柔軟に再適応することを保証するつながりの在り方、すなわち、民主主義としてのつながりの在り方として説明しました。

(3) プラグマティズム

① 帰結主義

デューイは、パース、ジェイムズという、デューイに先行するアメリカのプラグマティズムの哲学者から帰結主義という考え方を学びました。帰結主義とは、ある事物や観念(考え)の意味や価値を、その事物を使用してどのような結果が発生するか、あるいはその観念に従って行動した場合、どのような結果が発生するかによって検証することを主張する立場です。例えば、石という物体は、比較的多くの他の物体とこすり合わせたり、あるいはぶつけたりして使用し、他の物体を傷つけたり壊したりするという結果が発生します。そのようにして、「石は固い、すなわち、こすり合わせたり、ぶつけたりすると多くの物体を傷つけたり、壊したりする」というように、石という物体の意味を検証することかできます。また、「石を投げてぶつけるとガラスは割れる」

という観念の価値は、実際にそのように行動してそのような結果が発生することにより検証されます。つまり、事物や観念の意味や価値を、伝統的な哲学が論じてきたように、例えば、アイデアなどの本質に照らし合わせたり、自然権などの前提として仮定される原理にさかのぼったりして判定するという方法を否定したのです。事物や観念の意味や価値を、行動から帰結される出来事によって明確にすることを提案したのです。この点でプラグマティズムは、伝統的な哲学が掲げていた真理の究明、あるいは、真理に照らしての判定という主題を放棄しました。それに替えて、行動の方法の究明、あるいは、行動の現実性を高めることを、哲学の主題として掲げたのです。

そして、デューイは、帰結主義の考え方に基づいて、活動の公共性に関して新しい基準を模索しました。すなわち、デューイは「公共」についての伝統的考え方、つまり、公権力は「私」に対立し、私権を侵害する傾向を有する性悪的なものである、という考え方からの転換を図りました。デューイは、「公共的な活動」についての定義を、従来のように政府による、すなわち、私権に対立する公権力による活動という定義から、帰結として第三者に影響を及ぼす活動というように転換しました。この定義に従えば、経済的活動は、国民の多くの生活にその帰結として影響を及ぼす活動です。デューイによる活動の帰結を規準とする新しい定義に基づくならば、経済的な活動は私的な活動ではなく、公共的な活動になります。巨大企業の活動は、他の企業家の活動、労働者の労働条件、消費者の生活の安定・安全に大きな影響を広く及ぼします。したがって、経済活動の帰結は、多くの人の福祉、すなわち、公共の福祉に影響を及ぼすという点で、公権力によって規制・調整されるべき対象となります。多くの第三者の権利を守るために、政府がそのような活動を規制・調整することは正当な介入と見なすことができます。したがって、公権力によって保護される対象となる権利も、企業家の経済活動に対する自由ではなく、経済活動の帰結に影響として被る人々の福祉となるのです。

デューイは、国民生活に広く重大な影響を現実には発生させている経済活動の在り方は、それが自然権に由来しているという理由によって放任されるべきではないと考えました。人々にもたらされる帰結の重大性に鑑みて政府によって、公共の福祉という観点から規制・調整されなければならないと主張しました。ここに自由放任に替わり、政府が経済活動に介入して規制・調整するという新たな経済活動に対する原理が生まれたわけです。

## ② 実験主義

また、デューイは、ジェイムズの観念についての論述を手掛かりにしました。ジェイムズは、人間は観念に導かれて行動していること、そして、意図した結果を現実には達成することができるかどうかは、その観念の適切性とその観念を信じる意志の強さによると論じました。ジェイムズは、人間に実現可能だと信じさせ、実現に向けて行動を推進し、実際に実現という帰結に至った観念 — 目的として実現をめざした頭に描いたことがら — が真理だと考えたのです。

デューイは、目的を明確に意識し、どのように行動するかについて計画を立て、それに基づいて実行して問題を解決するということは、仮説を立てて実験的に活動を進める自然科学の実験的方法と同じであると論じました。デューイによれば、すでにこの時代に自然科学は、このような

実験的な方法で人間の現実の生活における様々な技術的な問題を解決し、人間の生活に多くの利便を生み出していたのです。人間の知性的な努力によって、人間が自然世界に対する改良に成功していることは、現実世界における否定できない事実となっていたのです。ですからこのような自然科学の方法に学び、社会問題の解決のための方法、すなわち、社会改良のための方法として転用することが可能なはずだと考えたのです。自然科学の実験的方法を社会問題の解決の方法とすることにより、人間は自らの知性的な努力によって行動を導き、その帰結として社会改良は可能だと主張したのです。

このようにデューイは、パースやジェイムズのプラグマティズムから、第一に、事物や観念の意味や価値について、実際にそれらを使用することを通じて現実に生み出される結果において明確にするとする帰結主義の考え方、第二に、生み出したい帰結に至りつくような行動の計画をしっかりと立てて行動を導くという実験主義の考え方を確立しました。

以上について確認しましょう。

デューイは、第一に、ヘーゲル主義から学び、自由は、個人に生来的に所有されているのではなく、人々のつながりの在り方によって社会的に保障されるのだと論じました。それにより、自由放任の経済活動の論拠、すなわち、経済活動は個人の自然権であるという考え方を否定しました。

第二に、進化論生物学から学び、社会は個体間の闘争・競争によって成り立っているのではなく、多様な個性的な人々の相互作用による全体的な調和・共生によって成り立っていると論じました。また、環境の変化は偶発的であり、人間は新しい文化の創造によって集団的に再適応して生存してきたと論じました。この点で歴史には法則はなく、また再適応は人間の主体的で知性的な努力、しかも、それぞれに多様な個性的な能力を有する人々の協同への参加・貢献によって遂げられてきたのです。

第三に、プラグマティズムから学び、経済活動の在り方について、自然権という形而上的な想定に遡及して考えるのではなく、それが現実世界の人々に生み出している帰結に基づいて考えるべきだと論じ、公共の福祉という観点から政府による調整・規制という介入の正当性を論証しました。また、自然科学と同様に、意図して実験的に活動を導くことにより社会改良を達成することが可能であると主張しました。

このようにして、デューイは、自由放任の経済活動を支持していた論理に対する反駁となる論理を構築したのです。ただし、デューイは、革新主義運動に参加しつつ、同時期にこれらの学説から自由放任の論拠を反駁するのに有効な考え方を抽出し、自らの思想へと変容させていったのです。そのようにして、デューイはメリオリズムを生きる思想を生成していったのです。

## 6. 経験概念の構築 — メリオリズムの論理 —

新しい思想は、古い思想に対する反駁という側面とともに、当面している問題解決のための方

法論という側面を有しています。デューイは、前述のように古い思想を反駁しました。では、デューイは、人間自身が自らの知性的な努力によって社会改良するための、どのような方法論を構築したのでしょうか。つまり、社会改良の達成を可能にする知性的な努力を推進するために、どのような理論を提案したのでしょうか。

### (1) 知性についての自然主義的説明

デューイは、近代哲学の祖であるデカルトが提唱した考え方、すなわち、人間は「理性」—— 正しく考える能力 —— の生まれながらの所有者であるという考え方を否定しました。デカルトのこの考え方は、近代の西洋では長く哲学の前提とされてきました。確かに人間は論理的に飛躍なく考える能力を所有しています。しかし、デューイによれば、そのような能力は生まれたときには潜在的なものに留まります。デューイは、人間の有する諸能力について、生後の環境との相互作用を通じて開花するものと論じています。例えば、人間は言語を話す能力を潜在的に所有しているものの、それが実現されるのは生まれた後に周囲の人との相互作用を通じてなのです。デューイは、伝統的な「理性」という観念を廃棄して、環境との相互作用を通じて発達していく知性という観念を新たに使用しました。

では、知性はどのように発達していくのでしょうか。

デューイは、人間を進化論生物学に基づいて把握しました。進化論生物学において、生命体は、環境と相互作用することによって生命を維持しています。そして、高度な生命体になると、環境との相互作用の方式が複雑になります。例えば、何かを道具として使用して間接的に環境に働きかけることにより、直接的に働きかけることと比べて極めて効果的に環境からの反応を得ることができます。また、時間的に隔たった環境と相互作用することができます。つまり、過去の出来事から学んだことを利用したり、時間的に未来に反応を得ることを計画して働きかけたりすることもできます。さらに空間的に隔たった環境と相互作用することができます。通信技術を使用して地理的に遠い場所の出来事に対しても働きかけて反応を得ることができます。さらに環境が変化したときに、新しい文化を創造することによって再適応することができます。高等な生命体は、このように環境と複雑に相互作用したり、環境の変化に柔軟に再適応したりすることができます。

つまり、デューイは、生命体の複雑で柔軟な相互作用の方式に知性を見出したのです。このようにデューイは、「理性」という形而上学的に想定された観念を前提とすることなく、生物学的に観察可能な事象に基づいて人間の知性について説明したのです。そして、知性とは、生まれた後に環境と相互作用することによって発達し高められていく能力なのです。どのような能力が開花して高められるかは、それぞれの時代の環境によって決定されます。環境に適応するための必要性によって開花される能力は異なるのです。また、知性は人間だけが特権的に所有している能力ではなく、他の生命体にも程度の差はあれ示されている能力なのです。したがって、デューイは、人間を世界の中で特別な特権的な存在とする考え方を否定し、人間と他の生命体とを連続的な存在として捉えました。

もちろん人間の知性については、他の生命体と比べて極めて高度です。また、人々の間でも知性に関する能力は、後に H. ガードナーが多重知性（MI）理論として提唱するように、多様であり均質ではありません。また、人によって知性的な多様な能力のそれぞれについて差異があることも事実です。知性についての多様な能力をどのような組み合わせで持っているかは、それぞれに個性的なのです。また、それらの能力は、生まれた後に環境との相互作用を通じて発達します。この点で教育が重要になるのです。このことはまた後に論じることにしてしましよう。

## (2) 人間の活動に示される知性

デューイは、生命体、特に人間の環境との相互作用の方式に知性を見出しました。では、環境に再適応する際に、人間はどのようにして変化した環境に再適応することに成功しているのでしょうか。

環境が変化してそれまでの相互作用の方式が機能不全となるということは、いわば問題の発生です。その場合、生命体は生き延びるために、新しい相互作用の方式を開発しなければなりません。環境から生命を維持するための有効な反応を引き出すための新たな相互作用の方式を開発する活動は問題解決、あるいは探究ということができます。デューイはそのような問題解決の事例を分析して、その活動ではどのような知識がどのように使用されているのか、思考はどのように機能しているのか、行動はどのように遂行されているのかを分析し、問題解決にどのように知性が見られるかについて解明しました。

例えば、森の中を道から外れて散歩していたとしましよう。特に進行方向に特別の障害がなく歩行そのものを意識する必要のない場合、環境との相互作用は習慣に従って効率的に行われています。しかし、前方に小川が見られた時、跳び越えられる川幅か、近くに跳び越えられるような地点はあるかなど、思考が機能して観察が行われます。習慣に停止がかかります。この場合、観察に基づいて「跳び越えられる」という判断がなされれば、跳び越えるという他の方式の行動が実行されます。しかし、詳細な観察の結果、「跳び越えられない」と状況について判断された場合、問題が発生することになります。

そして、周囲を見回したところ数本の倒木があったとしましよう。その倒木を見て、それを小川に橋として架けて渡るという考えが生まれたとします。そして、倒木の中から、小川の川幅より長く、渡るために乗っても折れることのない太さがあり、小川まで持ち運ぶことができる重さの倒木を選び、さらに転がらないように安定させるために石を添え置いて、実際に橋として架けて対岸に渡ることになったとしましよう。このようにして問題は解決されるのです。

この問題解決の一連の活動において、例えば、どの倒木を橋として使用できるかを判断するために、橋の長さ、橋の耐性、持ち運びの重量、橋の安定性などについての知識が使用されています。これらの知識は、倒木を橋として架けるための条件を示しています。橋として架けるためには川幅より長いこと、自分が乗っても折れないこと、川まで運ぶことができること、転がらないように安定させることなど、倒木を橋として架けるといふ行動が可能であることを判定するための規

則を使用することが必要となります。このように問題解決において使用されている知識は、伝統的な哲学が論じてきたような存在の真なる様相なのではないのです。知識とはある目的を実現するために、それに従うことが条件となる行動の規則なのです。これらは意味、すなわち、物事や出来事の関連や連続、あるいは働きかけと反応との結びつきなのです。このような意味を行動の規則として使用して、直面している問題状況の特質を明らかにしたり、目的を実現するための行動を計画したりするのです。デューイのいう知識とは意味であり、それは状況の特質を明確にしたり、目的の実現に効果的な行動を計画したりするための道具や材料なのです。

また、思考は、行動の規則としての知識を使用して未来における目的の実現のための行動を計画します。問題解決において思考は、形而上学的な原理に遡及して情報の真偽を判定することではなく、未来の帰結に向けて知識を駆使して予想し、どのように行動すべきかについて計画するために機能します。伝統的な哲学では、確かな原理から出発して論理的に情報を検証することが理性に合致した思考、すなわち、合理的な思考として重視されてきました。しかし、デューイは目的の実現という未来に向けて予想して計画することに思考の役割を設定しました。真理に照らして検証することではなく、特定の帰結を目指して行動について計画することが思考の果たす役割なのです。

さらに、行動とは、やみくもに行うという悪い意味での試行錯誤ではありません。伝統的な哲学では、現実世界における実践的な活動は、いくらそれを積み重ねても原理などの真なる知識を得ることはできないと見なされていました。しかし、デューイは、現実世界で実践的な活動に有能に取り組む熟練者の活動、例えば、医者や法律家、技術者、熟練職人などの実践的な仕事への取り組み方を分析しました。そして、それらの人々が毎回の活動から行動の規則としての知識を抽出して蓄積していること、そして、その後に取り組む問題解決において、それらを道具や材料として活用して、行動についての計画を立てて、実際に問題解決に成功していることを明らかにしました。つまり、知識を思考において活用して行動の計画を立て、そのようにして活動を実験的に導いているのです。行動は知識及び思考と緊密に結びついているのです。

したがって、問題解決は、必要な知識を適切に使用して、直面している問題状況の性質を十分に調べて、問題解決のために有効な行動を慎重に計画して、そのようにして行動を進めることにより遂げられるのです。つまり、知識を思考において活用して行動を実験的に導くことによって、現実的に成果が達成されているのです。デューイは、このように知識と思考と行動とが緊密に結びついていること、すなわち、目的として意図された問題解決という帰結に向けて、行動が実験的に導かれていくという方式に、知性が示されると論じているのです。この点で、知性とは、そのようにして展開される優秀な活動を修飾する誉め言葉なのです。

デューイは、人間が問題解決に実際に取り組んでいる活動をこのように分析することによって、問題解決という活動を知性的に導くための方法を解明しました。繰り返し言えば、行動の規則としての知識を活用して直面している状況について十分に調べ、解決のために有効な行動の方法について慎重に計画し、そのようにして活動を導くという方式です。このように取り組むことが知性

的な努力なのです。このような方式で活動を推進することにより、人間の知性的な努力による社会改良は可能であると論じました。メリオリズムのための具体的な取り組み方を提示したのです。

### (3) 確実性の増大

デューイは、このようにして、人間は自らの知性的な努力によって現実世界で発生している社会問題を解決し、社会改良を達成することができるという、メリオリズムを擁護する論理を構築しました。

ただし、一つ重要な点を忘れてはいけません。

知性は、人間の努力に絶対的な確実性を保証することはできません。この点で、人間の努力の知性的な水準をいくら高めたとしても、その帰結に絶対的な確実性を事前に完全に保障することはできないのです。つまり、人間の知性的な努力は、不確実性から逃れることはできないのです。現実世界に生き、そこで活動する人間は、不確実性を引き受けて問題解決に取り組まざるを得ないのです。しかも、人間は現実世界から逃避することはできません。この点で、デューイの論じた思考の方法は、問題解決 — 探究 — を導く絶対確実なマニュアルではありません。確実性を高めるための留意点なのです。『思考の方法』（1933年）で述べられている「反省的思想の五つの側面、あるいは局面」を、探究を成功させるためのマニュアルとして理解することは誤りです。

人間の知性的な努力において可能なことは、目的、すなわち、生み出したい帰結に至る確実性を高めることなのです。絶対的な確実性が人間の活動に保障されることはあり得ません。しかし、人間は知性的であることにより、その確実性を高めることはできるのです。そのために行動の規則としての知識について、適切かつ有効なものを十分に活用して、状況の性質をよく調べ、行動の方法を慎重に計画することが要請されるのです。また、そのために、毎回の問題解決の活動を反省し、そこで有効だった知識や新たに発見された知識を確認して、その後の問題解決において使用できるように蓄積するのです。そのようにして次の問題解決の活動を知行的に行うことができるように準備するのです。さらに、知性的であることにより、うまく解決できなかった問題解決の取り組みを反省することからも、その後に役立つような知識を抽出することができます。

伝統的な哲学からは、デューイのこのような問題解決についての考え方に対しては、相対主義という非難が浴びせられました。しかし、メリオリズム擁護の論理の構築をめざすデューイの思想は、真理の探究のための合理的な方法の究明ではなく、現実世界における問題解決のための知性的な方法の究明を目指すものでした。現実世界を生きる人間のための問題解決を主題とする思想なのです。現実世界において人間を取り巻く環境の変化は偶発的です。人間は偶発的に変化し続ける状況の中で問題解決に取り組みつつ生きる行為者なのです。人間は、そのような世界から逃れることも、このような行為者であることを放棄することもできません。問題解決を先延ばしにすることも、それに失敗することも許されません。それは人間の種としての生存にかかわってきます。そのような「状況の中の行為者」としての人間には、知性的な努力によって確実性を高めつつ、問題解決を通じて社会改良に取り組み続けることが運命づけられています。

このようにメリオリズムを生きるとは、選択的なものではありません。メリオリズムを生きることは、人間にとって宿命なのです。人間は不確実性を引き受けつつ、知性によって確実性を高めるべく努力して問題解決に取り組むという生を生きる存在なのです。

デューイにとって経験とは、一つは反省された活動です。つまり、意味が抽出されて次の活動において、それを使用してその後の経験の確実性を高めるように蓄積されている過去の活動です。もう一つは意図された活動、すなわち、ある帰結を意図して意味を組織的に使用して進められる活動です。いずれにしても知識と思考と行動とを十分に関連させて、知性的に取り組まれる活動です。つまり、人間が自らの知性的な努力として取り組んでいる問題解決の活動です。この点で、経験とは、メリオリズムに基づく活動の方式なのです。

デューイは、メリオリズムを擁護する論理を、経験という概念として構築したのです。

## 7. メリオリズムの社会

人間は、環境の変化に対して、新しい文化を創造することにより、集団として生存を維持してきました。人間は、一人の個人に閃いた新しいアイデアをみんなで協同して文化として洗練し、それをみんなで共有することによって、新しい環境に集団として再適応してきたのです。そのようにして生存の更新に成功してきたのです。そうであるならば、人間の知性的な努力による問題解決への取り組み、すなわち、経験は、個人としてだけではなく、集団によって協同として行われることが重要になります。そのような観点から考えるならば、人間は相互に闘争や競争して発展してきた存在ではなく、協同や共有によって発展してきた存在だといえます。協同して問題を解決し、文化を共有することに、人間の社会が環境の変化に対する再適応に成功して、維持され発展してきた理由を見出すことができます。

したがって、人々の間のつながりの在り方が重要なのです。人々が協同して問題解決に取り組む、再適応に有効な文化の共有を可能にするつながりとは、どのようなつながりの在り方なのでしょうか。

### (1) 自由なコミュニケーション

協同とは複数の参加者が活動の目的、それを達成することの意義、取り組み方についての計画などを共有し、それぞれが分担した役割を果たしていく活動です。ですから、例えば、人間と馬とが畑を耕すという作業を共に行っていたとしても、その活動は協同ではありません。人間と馬とでは、その作業を行う目的が異なるからです。人間は数ヶ月後の穀物の収穫、さらにはその出荷まで見通しています。馬はその日の作業後に餌をもらうことを期待しています。

人間たちによる協同的な活動では、何を目的とするのか、その活動の意義は何か、取り組み方をどのように計画するかなどが、参加者たちによる合意に基づいて決定されなければなりません。

参加者たちが協議して合意を形成していること、あるいは、少なくとも参加者にそれらについての説明がなされ、参加者から自発的な同意が得られていることが、その活動が協同といえるための条件です。もちろん、活動が開始された後であっても、条件や状況の変化などが発生した場合、参加者たちの再協議による修正や変更が柔軟に行われなければなりません。つまり、参加者の間でコミュニケーションが活発に展開され、そのようなコミュニケーションの自由が保障されていることが、協同としての要件なのです。

つまり、コミュニケーションがなされることにより、協同による人間の集団的な経験の確実性が増大するのです。多様な人々のそれぞれの経験から得られた知識が結び付けられて使用され、また、多様な人々の個性的な思考の方法が機能することにより、多様な行動の方法についての計画を考え出すことができます。協同的な活動の機能は、コミュニケーションの活発さによって知性的なものとして高められるのです。この点に関して、憲法が制定されていること、三権が分立していること、国民主権に基づく普通選挙が実施されていることなどは、その国家が民主主義国家といえるための基盤的な条件ではあります。しかし、デューイは、たんに法や制度が整えられているだけでは、その国家で民主主義が機能しているとはいえないと述べています。社会的な問題の解決が、関係する人々の参加による協同的な活動として取り組まれている点に、つまり、法や制度が人々の活発なコミュニケーションを促進する仕組みとして実際に機能している点に、民主主義の尺度を設定したのです。協同的な活動への参加とは、コミュニケーションへの参加を基盤としているのです。多様な個性を有する人々のコミュニケーションに基づく協同を通じて、人間は自らの集団的な経験の確実性を増大することができます。ですから民主主義は環境の変化に対して強いつながりの在り方なのです。全体主義では全員が均一となることが求められます。均一な要素の間でのコミュニケーションから、新しいアイデアは生まれません。独裁国家では人々の間でのコミュニケーションは禁止されます。コミュニケーションがなければ、新しいアイデアの流通やそれを洗練するための協同はなされません。

このように人々の間での自由なコミュニケーションに基づく協同により、人間は集団としての経験の確実性を増大することができます。デューイにとって、コミュニケーションとは、相互の経験のやり取りです。例えば、一人の人の問題解決の経験を他の人に伝えることにより、伝えられた人は、自らの次の問題解決への取り組みにおいて、その伝えられた他者の経験を利用して自分自身の問題解決の確実性を増大することができます。このように一人の人の経験を他の人々に伝達し、他の人々の経験において役立つように、集団的に共有していくことがコミュニケーションなのです。また、その経験が多くの人々に伝達されていく過程で、当初の経験が他の人々の経験と照らし合わされて修正されたり洗練されたりします。そのようにして共有された経験が文化となるのです。

このようにデューイは、人間の主体的で知性的な努力による社会改良の可能性を、単に個々の人間が有する能力として論じたわけではありません。コミュニケーションを通じて、協同することによって、集団の経験としての確実性を高める可能性を論じたのです。知性の協同、あるいは、

集団的な知性の可能性です。それを保証する人々のつながりの在り方を社会に実現することが課題となるのです。そのようなつながりの在り方が民主主義なのです。

## (2) 個性の平等と自由

先に述べたように、新しいアイデアは、一人の個性的な成員の閃きとして生まれます。ですから、新しい文化の創造は、多様な個性的な能力が尊重され、それぞれに個性的な成員間の自由なコミュニケーションが保障されている社会において可能なのです。

環境の変化は偶発的です。いつどのような方向に変化するかは、ある程度までは予想できるかもしれませんが、完全に予想することはできません。想定外の変化もしばしば発生します。ですから生命体は、親と子どもの間でも、また同一の親から生まれた子ども相互の間でも、少しずつ形質が異なっています。環境が変化したときに、いずれかの子どもが再適応に成功できるように、いわば保険として多少ともそれぞれに異なった形質を有する子孫を残すのです。繰り返し述べますが、人間は知性によって新しい文化を創造することによって、集団として再適応に成功して、みんなで生き延びてきました。このような観点からも、社会の中に多様な個性的な能力を有する成員を確保しておくこと、そして、自由なコミュニケーションを保証することが、想定外の環境の変化に再適応するための要件となるのです。

民主主義社会において、自然権として想定されているような自由を相互に尊重し合えること、また、経済的な平等をある範囲で確保することは重要です。デューイは、前述のような観点から、自由や平等について次のように考えました。

まず、自由についてです。デューイは、それぞれの個性的な能力を最大限にまで成長させることへの自由、そして、協同的な活動においてその能力を発揮して、社会貢献に参加することへの自由を主張しました。ここで、デューイが、たんに個性的な能力の存在の自由を主張したことにとどまっていな点に留意しなければなりません。個性的な能力がその所有者に実現させるためには、それを発達させるための環境が必要です。つまり、教育がなされなければなりません。社会に教育という制度が存在して機能することにより、それぞれの人の個性的な能力が発達して現実において開花するのです。個性的な能力がその所有者にとって自由に発揮できる能力であり、社会への貢献として役立てられる能力となるのです。自由とは、それぞれの人の所有している個性的な能力を、それぞれの人が具体的な活動において最大限にまで発揮していることに示されます。その能力を所有している個人が、実際に具体的に行動して周囲に働きかけて意図した反応を得ることができなければ、その個人は自由であるとはいえません。したがって、自由は、それぞれの人の個性的な能力を最大限にまで発揮できる制度やシステムを整えるとともに、それぞれの人の個性的な能力の成長が最大限にまで遂げられるような制度やシステム、すなわち、教育を整えることによって実現されるのです。このようにデューイの論じる民主主義社会において、教育は重要な社会的機能を担っているのです。

次に平等についてです。先にも述べましたが、環境の変化は偶発的です。ですから生命体につ

いていえば、どのような個性的な形質を有する子どもが新しい環境に再適応できるかは、あらかじめ予想することはできません。この点で、できるだけ多様に変異した形質を残すことが生命体にとっての保険となるのです。したがって、人間の社会が偶発的な環境の変化に再適応するための新しい文化を創造するためには、多様な個性的な能力を有する成員が社会において存在していることが必要となります。したがって、デューイにとって平等とは、多様な個性的な能力についてのそれぞれの平等なのです。しかも、単に多様な能力が存在していることに対する形式的な平等ではありません。それぞれが最大限にまで発達して開花されるように教育を受けることの保障に関する平等であり、また、それを発揮して社会に貢献するために協同的な活動に参加することに関する平等なのです。ある特定の能力だけが、その発達や貢献が優遇されるのではなく、あらゆる能力の発達と貢献に関して開かれて保障されることが平等なのです。このような平等を実質的に保障するうえでも、デューイの論じる民主主義社会では、教育は重要な社会的機能を担うのです。

自由放任の経済活動が展開される社会では、経済的な能力を有する人だけが優秀な個人として評価されていました。デューイによれば、社会を取り巻く環境が変化すれば、そこにおいて重視される能力も変化すると述べています。また、たとえ経済的な能力が重視されている時代においても、他の能力も不可欠の役割を果たしていると述べています。個人間の闘争や競争によって社会が進化すると論じる社会ダーウィニズムの立場に立てば、経済的な能力に優れた個人以外は淘汰されてしまいます。そうなる環境が変化した時に、新しい文化を創造して再適応することができなくなってしまいます。デューイは経済的な能力に優れた個人が活躍することを否定していません。しかし、その他の多様な個性的な能力との調和的・共生的な相互依存関係が基盤となっていなければなりません。そのような基盤を否定する考え方を批判しているのです。それは環境の変化に対する再適応の妨げとなるのです。

デューイは、環境の変化に柔軟に再適応できる社会の在り方という観点から、多様な個性が相互依存的に調和・共生しているつながりの在り方を重視しました。多様な個性のそれぞれの自由で平等な成長とそれを発揮しての貢献が保障される人々のつながり方です。それがデューイにとっての民主主義社会なのです。

### (3) コモンマンへの信頼と教育

社会ダーウィニズムに基づいて自由放任の経済活動を支持する企業家や学者は、人間が生まれつき所有している能力の自由な発揮による闘争や競争を通じて社会は進歩すると主張しました。つまり、企業家として成功するような優秀性は、その個人が生まれながらに所有している能力であると考えられていたのです。逆に言えば、淘汰されてしまう人は生まれつき能力の点で劣っていると見なされたのです。

確かに人間の生来の能力には差異があります。デューイは、人間の生来の能力に関しては、個々の要素的な能力の優秀性 — 例えば、ある観念が頭に思い浮かぶという、示唆が速やかに、多様

に、連続的に得られるというような — についていえば、個人間に差異があることを認めています。しかし、人間の能力は多様であり、個々の人間は、多様な能力を組み合わせとして所有しており、その組み合わせの状態はそれぞれにより多様で個性的なのです。一人の人間を見れば、ある特定の要素的な能力では劣っていても、他の特定の要素的な能力では優れているというのが現実です。経済的な能力という特定の要素的な能力のみで、人間の能力について評価することはできないのです。また、その能力だけが重視されることは環境の変化への再適応を遂げる上で危険なのです。

革新主義運動では、デューイをはじめそれに参加した学者たちは、人間の能力は生まれたときの差異よりも、教育を通じて達成される差異の方が大きいと主張しました。この主張は、普通の平均的な人々、すなわち、コモンマンには、社会改良のための知性的な活動に参加する能力はないという考えに対する反論として主張されました。デューイが設置したシカゴ大学附属実験学校における教育活動は、コモンマンの教育の可能性を実証するための試みであったといえます。学校教育という活動そのものによる、デューイ自身の革新主義運動への具体的な参加だったのです。『学校と社会』以後も、デューイは新教育運動をはじめ教育に関与し続けます。1916年の『民主主義と教育』は、デューイが民主主義社会を再構築するための、すなわち、教育を通じて社会改良を担い得る能力をどのように発達させることができるのかについて論じた著書です。いわば、コモンマンの教育の可能性とその方法について示した著書なのです。デューイは、その後の政治・経済や社会などの在り方について論じた著書においても、教育を通じてコモンマンの能力を発達させることの可能性と必要性を繰り返し指摘しています。

デューイの論じる教育は、成長する能力を育成することを目的とします。すなわち、それぞれの子どもが、自分自身の個性的な能力を、生涯にわたって成長させ続ける能力を育成することを目的とします。そのために子どもたちの興味・関心がある素材やテーマに基づいた学習活動が設定されます。そして、子どもたちが自分たちで全身全霊を打ち込んで取り組むことができるように環境が整えられて活動が支援されます。このようにして子どもたちが取り組む学習活動がオキュペーションなのです。教師は、子どもたちがそのように活動に取り組むための環境を設定して支援することを役割とします。デューイは、それぞれの子どもの個性的な能力の発達を遂げることをめざす教育活動の在り方をこのようにして探りました。

また、デューイは、子どもたちの学校の生活と社会における生活、特に民主主義の生き方が、前者から後者へと発展的に連続するように配慮しました。デューイは、『学校と社会』において、学校を子どもたちにとって「小型の共同体、胎芽的な社会」とすることを提唱しています。つまり、民主主義社会における多様な個性的な能力を有する人々の参加と貢献によって取り組まれる協同的な問題解決を、学校のカリキュラムにおける子どもたちの活動の形態としました。子どもたちが自分たちの達成を目指すプロジェクトに協同して取り組む探究的な活動です。このような活動において、子どもたちは活動の目的やその意義、さらには活動の進め方などについて協議して共通の理解を形成し、それぞれの個性的な能力を生かして活動を分担し、それぞれ相互依存的に調

整しながら活動に取り組みます。そのようにして展開される活動では、当然のこととして、子どもたちは仲間と密度の濃いコミュニケーションを行わなければなりません。相互の経験から抽出されている知識や技能が伝え合われることにより、アイデアが発展して具体化されたり、活動における問題が技術的に解決されたりします。子どもたちは、このようなコミュニケーション豊かな協同への参加と貢献を実地に経験するのです。そのような活動を積み重ねることにより、協同的な活動に参加して貢献する能力を発展的に育成することをめざすのです。

また、デューイは、そのような子どもたちの興味関心に基づき、子どもたちが主体的に意識を集中して取り組む学習活動において、そこにおける必要性から知識や技能を習得させることを主張しました。もちろん習得させる内容は、読書算の基礎的なリテラシーだけではありません。社会や生活の発達に関する歴史的理解や科学的原理の洞察にいたる内容も含まれます。また協同すること、相互の個性を尊重すること、他者の境遇を洞察し配慮することなど、民主主義の生活の仕方に関する理念や方法なども含まれます。

そのようにして学校での経験を民主主義社会における経験へと連続的に発展させることを目指しました。デューイの教育論は、教育における重力の中心を子どもに移したとして評価されています。この点でデューイの教育論は、教科ではなく子どもの生活の論理を重視し、子どもの生き方を育てることを目指す教育論です。しかし、それは、社会改良に向けて知性的に努力することのできる能力、また、そのような活動を協同として組織し、そこにコミュニケーション豊かに参加・貢献できる能力の育成を主眼に置く教育論なのです。この点でデューイは、教育を通じての社会改良を主張し、それをめざしたのです。つまり、過去の遺産の伝達から、それらを使用しつつ現在の社会を改良していく能力の育成に学校教育の社会における役割を移したのです。

メリオリズムを生きることは、特定の能力に優れたエリートのみ可能な生き方ではありません。コモンマンの生き方でなければならないのです。また、民主主義とは、コモンマンの参加と貢献によって取り組まれる協同的な活動が展開されていることに示されます。デューイの教育論では、コモンマンがメリオリズムを生きる能力を有していることが主張され、教育を通じてそのような能力を発達させて開花させるための具体的な方法が論じられているのです。

人間の知性的な努力による社会改良は、多様な個性的な能力を有する人々の協同によって、それを遂げる確実性は高められます。人間は、コミュニケーションを通じて相互の経験を交換して共有することができます。多様な個性的な能力が社会に実現されて確保されていることにより、環境が変化した際に再適応するための新しい文化を創造することが可能になります。この点で、教育を通じて多様な個性を最大限にまで発達させ、それによって協同的活動に参加し貢献できる制度やシステムを準備して機能させることが不可欠となります。そのためにも教育には、普通の人々がそれぞれの個性的な能力を最大限にまで発達させ、また、協同的な活動に参加して貢献できるための経験を発展させるという役割が求められます。民主主義とは、人々が協同的な活動に参加して社会的な問題の解決に貢献しているという生き方に示されます。そのように知性的な努

力が集団的に機能していることに示されます。メリオリズムとは、そのように社会改良に取り組む民主主義社会における人々の生き方なのです。

## おわりに

ヘーゲルは、「ミネルヴァのふくろうは、たそがれがやってくるとはじめて飛びはじめる」という言葉を残しています。この言葉は、ある時代において人々がその時代の社会的な問題の解決に向けて生成してきた思想は、その時代の終焉を迎えるころに、つまり、社会問題が一応の解決に達した段階において明確にされるということを述べています。新しい思想は、社会問題の解決に取り組むことを通じて生成されるのです。まず新しい思想が誕生して、それが人々に問題の所在を告げて、解決に向けて人々の取り組みを導くではありません。問題を意識し、解決に向けて取り組む過程で、新しい理想が明確になってくるとともに、他方で、論敵が立ち顕われてくるのです。そして、論敵に対抗して新しい理想を実現するための論理の必要性が自覚され、その構築に向けて思想活動が立ち向かうのです。そのように時代の社会状況との相互作用を通じて思想は生成されるのです。そして、その取り組みが終焉を迎える時期に、その取り組みを通じて生成された思想が反省され、論理的に体系化されて哲学として構築が完成するのです。この点で、哲学は一つの時代における社会改良の取り組みを後付的に正当化する論理ともいえるのです。

ですから、本講演で述べてきたようなデューイのメリオリズムの思想は、1800年代末から1900年代初頭にかけてのアメリカにおける革新主義運動を導いた思想ではないのです。デューイが革新主義運動への参加を通じて生成してきた思想なのです。革新主義運動への参加によって意識した思想的課題に基づいて、デューイは、ヘーゲル主義、進化論生物学、プラグマティズムから学び、自由放任の経済活動を支えていた論理を反駁し、人間の知性の協同による努力を通じて社会改良は可能であるとする論理を構築していったのです。ですからその論理の完成は、革新主義運動が一定の成果を達成してその終焉を迎える1916年の『民主主義と教育』だったのです。この点で『民主主義と教育』は、デューイの経験を中心概念とする哲学の構築として、また、メリオリズムに基づく民主主義を擁護する論理の提案として評価することができます。革新主義運動を後付的に正当化する論理だったのです。

その後、デューイは長寿に恵まれ、60歳代、70歳代に多くの著作を残しました。経験概念に基づいて、『民主主義と教育』で論じたテーマを哲学、倫理学、政治・経済論、芸術論、宗教論などごとに、また、それぞれの時期における社会問題に論及しつつ多くの著作でメリオリズムの生き方に関する論理を体系的に、哲学として発展させました。

デューイのメリオリズムの思想は、相対主義だ、人間の知性への楽天的なほどの信頼だ、と批判されてきました。しかし、すでに述べましたが、人間にはその生存が絶対的に保証される基盤は存在しないのです。偶発性に支配される動的な世界の中で、自ら知性を持みとして協同して問題解決に取り組みつつ生きる存在なのです。社会問題の解決を放棄し自然の闘争や競争に自らを

委ねることも、あるいは、絶対的な存在や法則に自らを委ねることも、デューイから見れば現実逃避であり、また、人間の主体性の放棄なのです。人間が主体性に生きること、すなわち、知性的な努力により社会改良することは、人間の可能性というよりは、デューイにとって人間の宿命なのです。絶対的なものへの従属こそ、楽天的な現実逃避なのです。

現代の世界は、100年少し前のアメリカと多くの点で類似した状況となっています。経済のグローバル化に伴う経済的な格差が発生しています。グローバル化した経済活動には新たなルールに基づく調整や規制が必要とされています。アメリカをはじめとする西洋的な文化とイスラム原理主義との文化的な対立、近代西洋型の民主主義国家と新たに興隆してきた全体主義的な国家との対立などが発生しています。分断と対立は世界規模のものとなり、それだけ深刻なものとなっています。また、SDGsに示されたような、人類が地球規模で一体となって協同して解決に取り組まなければならない、差し迫った課題に直面しています。

メリオリズムは、人間の知性的な努力に信頼を寄せます。しかし、それは楽天的な信頼ではありません。それは、自らの知性に恃まなければ人間は生き残ることができないという、人間の実存を引き受ける覚悟でもあります。人間は不確実性を受けつつも、知性により確実性を増大して問題解決に取り組む実践者です。完全にわかり合えるとは限らないものの、共通の理解を構築しようとコミュニケーションする言語使用者です。それぞれの個性を差異として排除や攻撃し合うのではなく、相互の個性を協同して新しい文化を生み出していく創造者です。確かに、1920年代のアメリカに兆しとして見られていた大衆社会では、W.リップマンが指摘したように、コモンマンは健全な輿論の担い手である公衆とはなりにくい状況が発生していました。また、R.ニーバーが指摘したように、人間には集団になると、相互に対して残虐になるという傾向もあります。しかし、人々の政治的な無関心や一時的な熱狂、集団的な残虐性などは、ある特定の条件の下での人間の傾向ではあるものの宿命ではありません。人々の間のつながりの在り方の問題なのです。デューイのメリオリズムも人間にとって一つの可能性に留まるものです。しかし、私たちが戦争を回避して平和を維持し、また、貧困など経済的な格差を縮小し、様々な差別・抑圧をなくし、持続的な発展を続けていくためには、デューイのメリオリズムを私たちの基本的立場として確認することが必要なのです。

- ・この世界は、多様な要素の相互依存による調和・共生によって成り立っています。
- ・この世界は、動的で偶発的な変化に支配されていますが、人間は多様な個性的な能力の参加・貢献による協同を通じて、そこで発生する問題を解決してみんなで生存を維持することができます。
- ・人間は、コミュニケーションして知性を協同することにより、社会を改良することができます。

現代において、私たちは、デューイのメリオリズムについて発展的に理解するならば、それを人間の知性に対する信頼の表明というよりは、社会改良に対する知性的な努力を自らの義務として引き受ける生き方と理解しなければなりません。私たちの自由、平等、人権の保障、平和、環境保護などは、絶対的なものによって守られてはいないのです。それらの価値を共有している人々

のつながりの中で、すなわち、メリオリズムを生きる人々の共同体の中で、その共同体の活動を民主主義にふさわしく機能させることによって保障されるのです。民主主義は、民主主義の社会を維持し発展させようと努力する、人々の知性の協同によって維持され発展していくのです。メリオリズムを生きることについて、このことをデューイからの学びとして強調し、本講演のまとめとさせていただきます。